TAMIYA NEWS 資料写真集·2 ドイツ戦場写真集 1

PHOTO CREDITS
BUNDESARCHIV
KOBLENZ

戦場写真集

兵器研究家　床井雅美

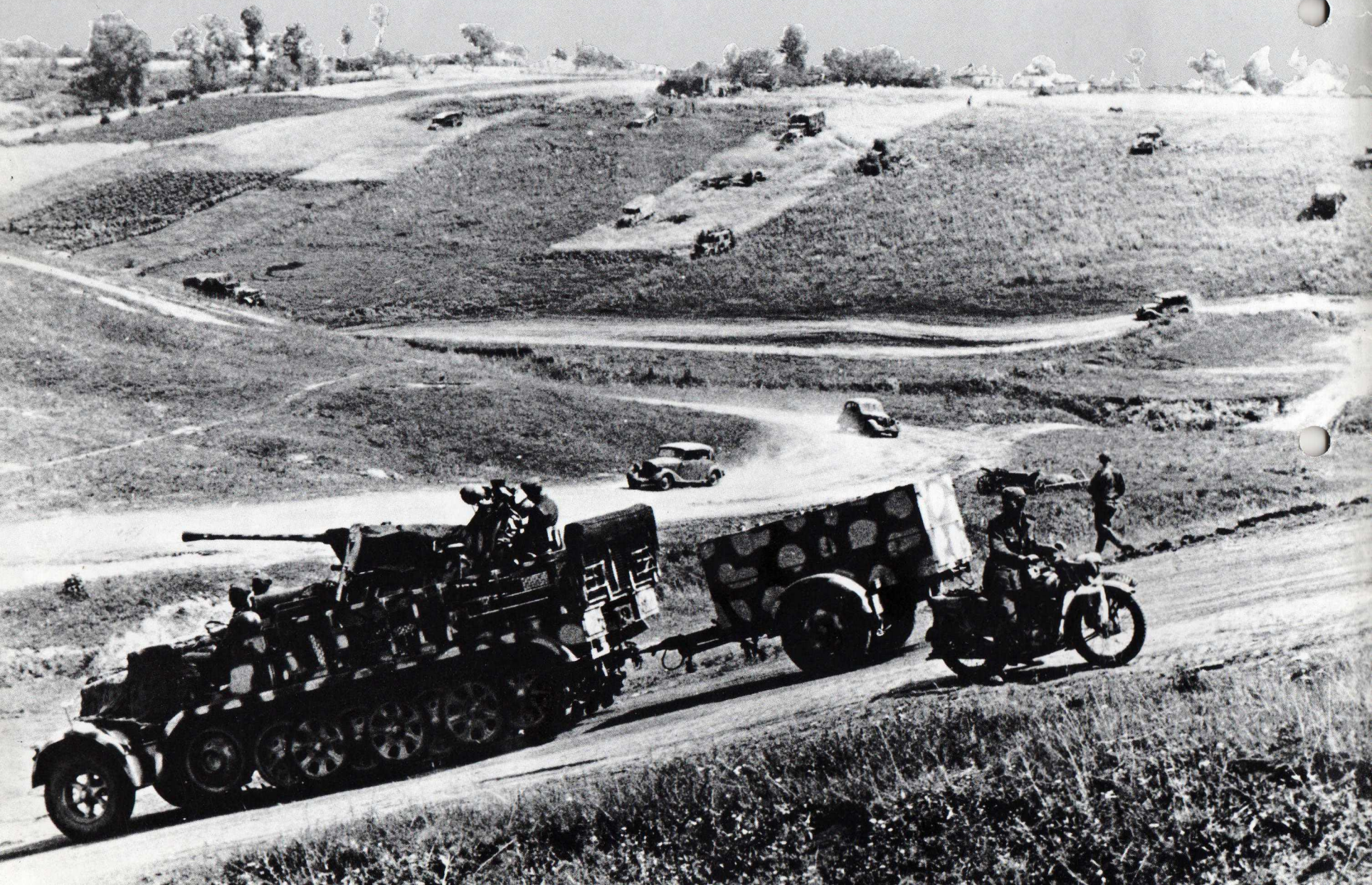
力拡張の最も有効な手段として利用し、放送、映画、写真、印刷物などそのマスコミ動員は多彩を極めていました。

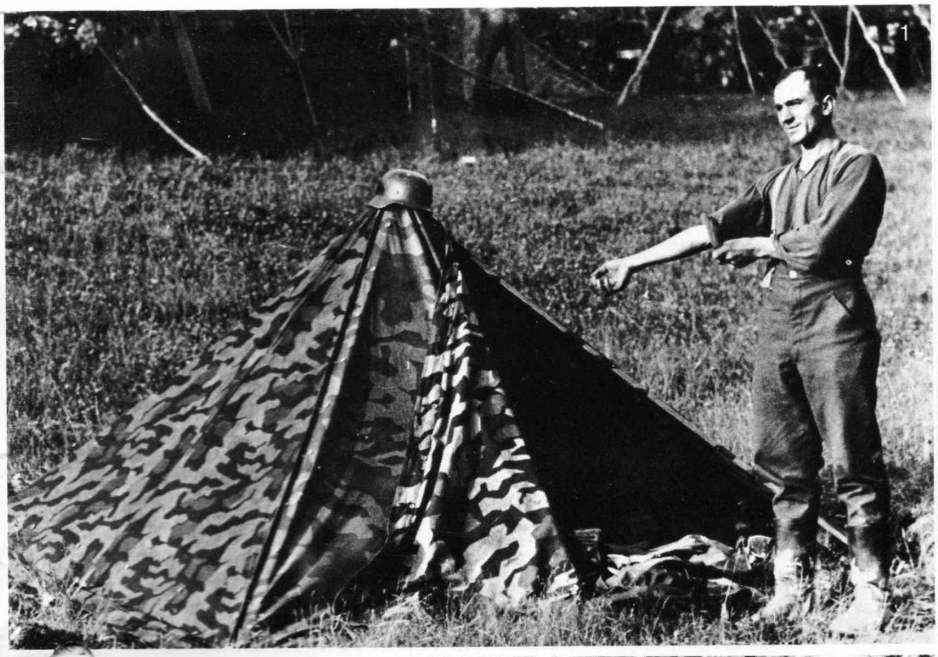
1939年9月、対ポーランド戦によって第二次大戦が始まるやドイツ軍の特殊部隊が各前線に出現しました。彼らは歩兵の軍装をし、また飛行士の服装をしていましたが、ただ一つ他の兵士達と異った点が見受けられました。それはナチ党が政権を取ったと同じ頃にドイツ南部のウェッツラーで生産を始められた小トされた写真がアルバムに納められた上で届けられ、彼の日課の一つにはこの写真アルバムを見る事が重要なものとなっていたのです。

このカメラを武器とする軍隊はドイツ軍内ではＰＫ（プロパガンダ・カンパニー）宣伝中隊と呼ばれていました。陸軍、海軍、空軍そして戦闘親衛隊に各々独立した中隊を持ち、ドイツ軍の闘った全戦域に派遣されたのです。

恐らく、ナチスドイツ以前に彼ら程記録を残した軍隊はなかったでしょう。それ位ＰＫ

知る上でこのような重要な資料の存在は、私達、研究家にとってこの上もなく有難いことと言えるでしょう。今回はその中から約170点程を選び、ご紹介することにいたしました。ただ残念なことに、これらの写真の詳しい記録はほとんど失なわれていて、撮映場所、年月日など不明なため、すでに知られている資料から解るだけの説明をしたいと思います。この写真集を、モデル作り、情景作りなどの資料として役立てていただければ幸いです。



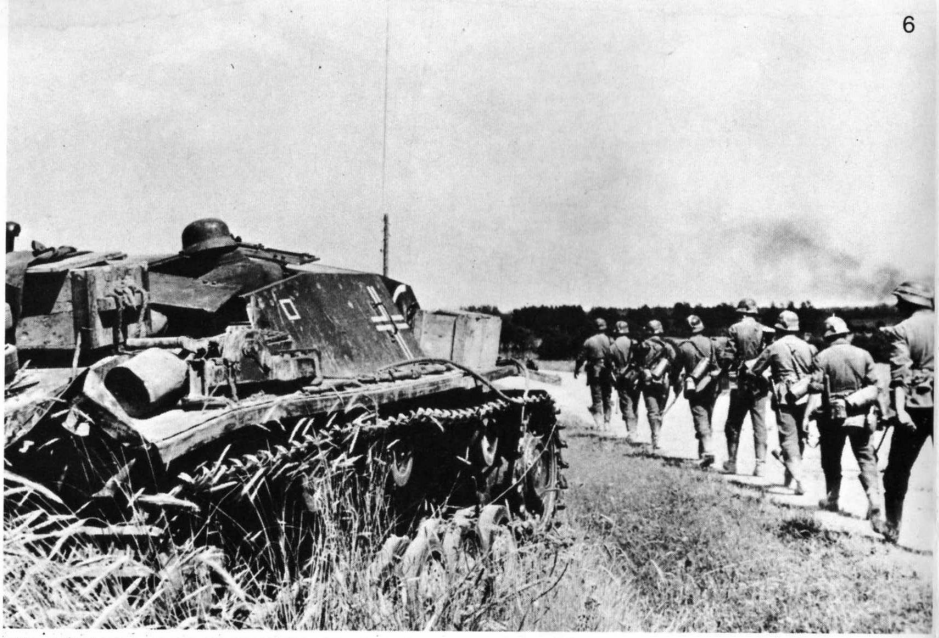

1

3

4

2

5



6

BAR
CAFE
BIERES DE LA Strasbourgeoise
BIERES
DE
CHAMPEN
CAFE DU VAL
AU BON NICOLAS

7

8

WH
70088

10

11

12

13

14

15

16

17

18

19

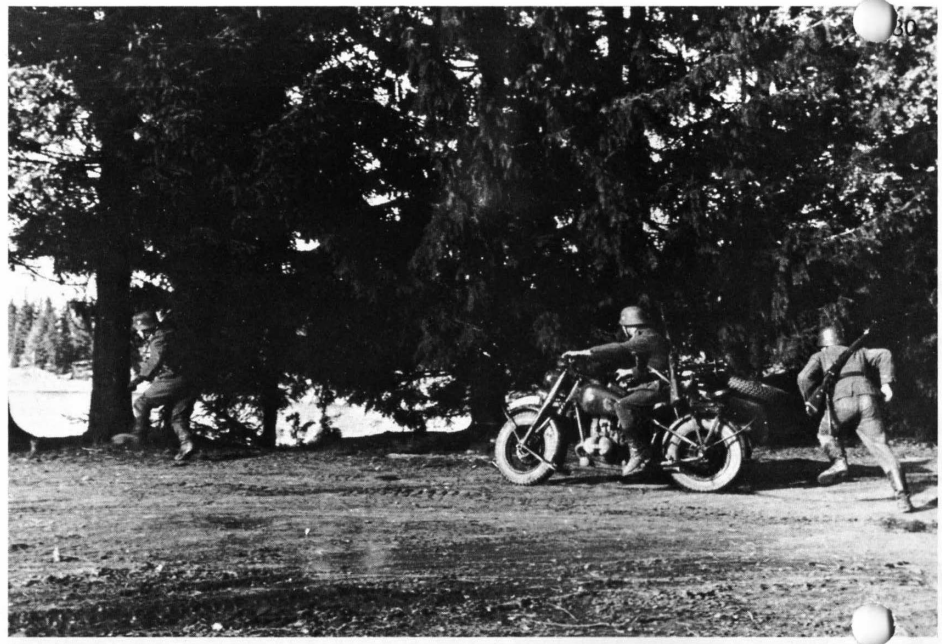
20

21

24

26

29



30

31

32

33

34

35

36

37

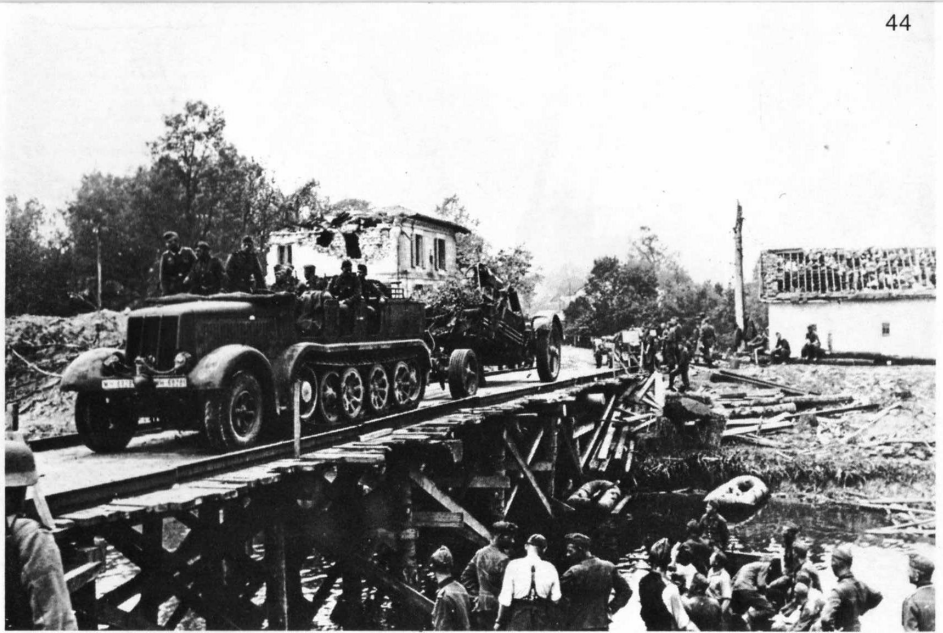
38

39

41

42

43



44

45

46

47

48

49

50

51

52

53

55

54

56

57

58

59

60

61

62

63

64

65

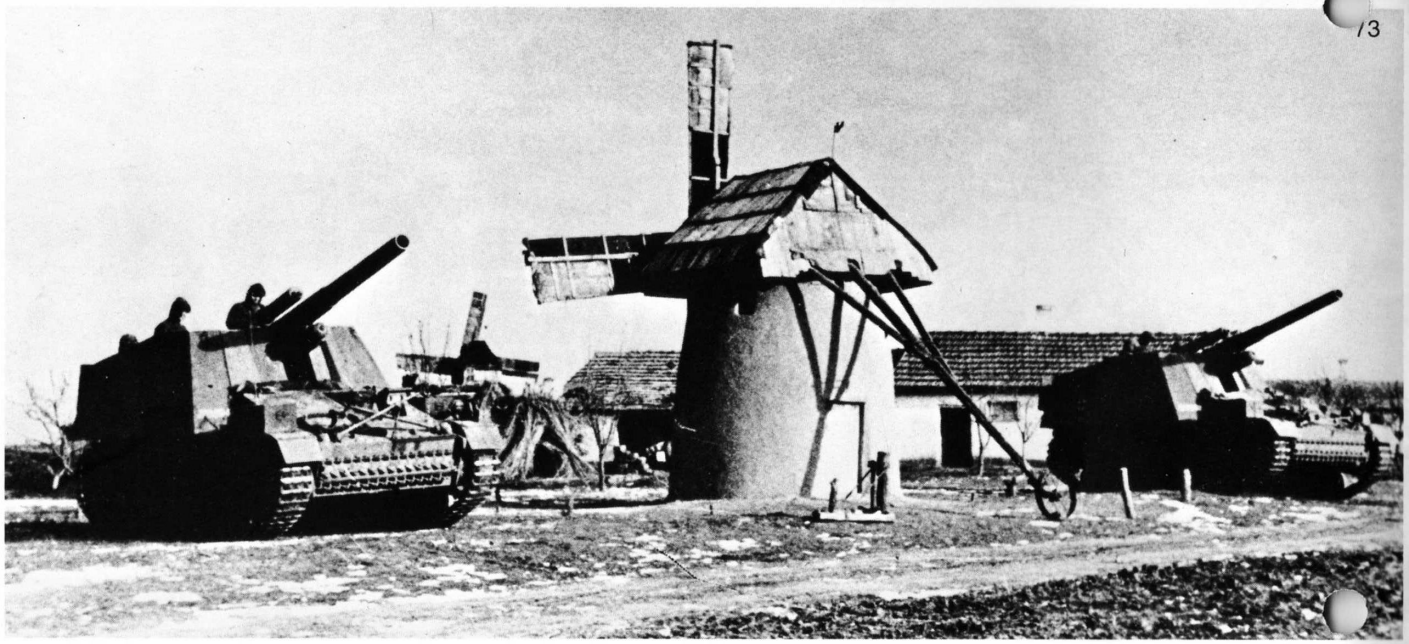
67

68

69

70

71

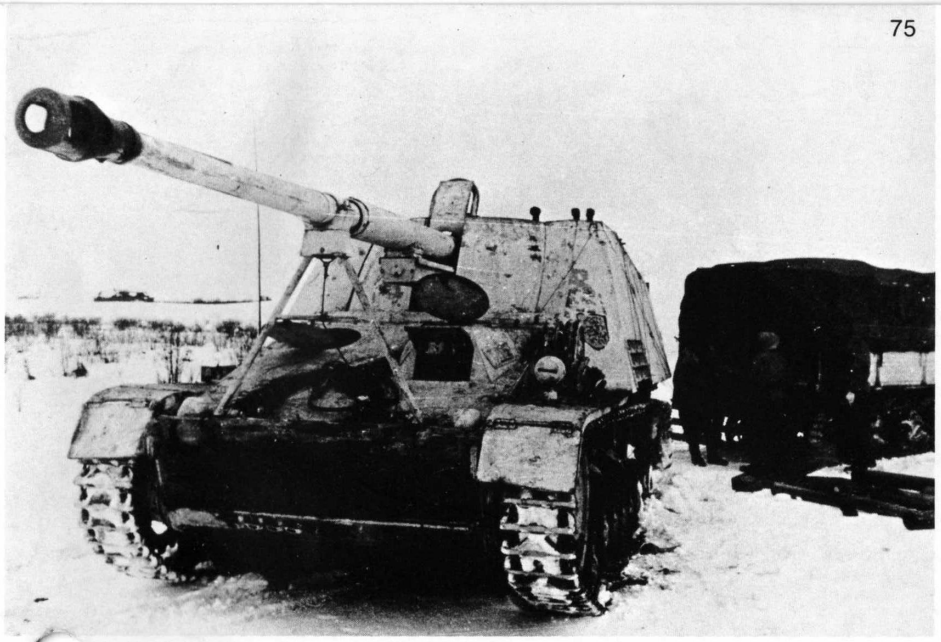


73

72

74

75



76

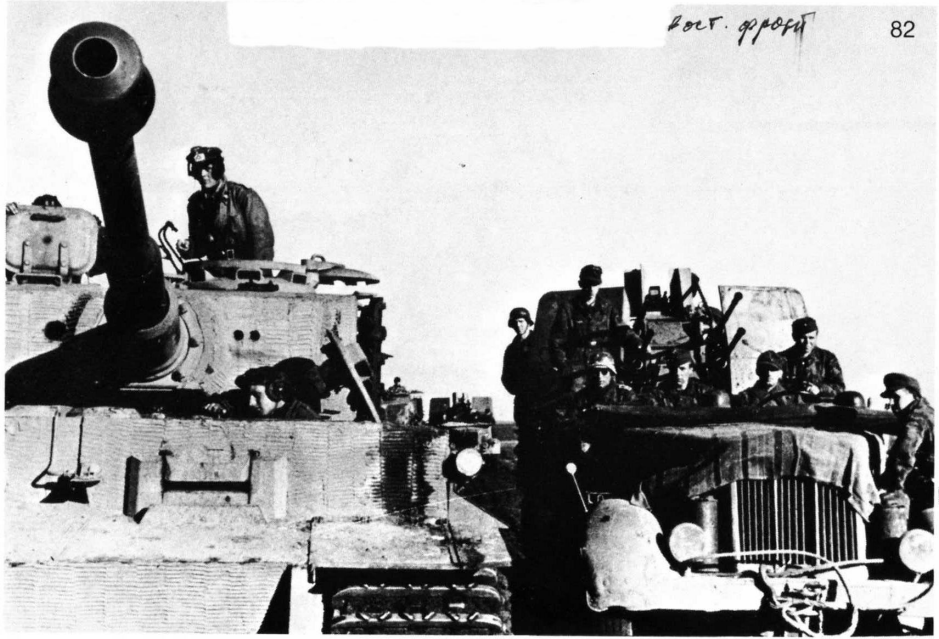
77

78

79

80

81



Вост. фронт

82

83

84

85

88

89

90

91

93

92

95

96

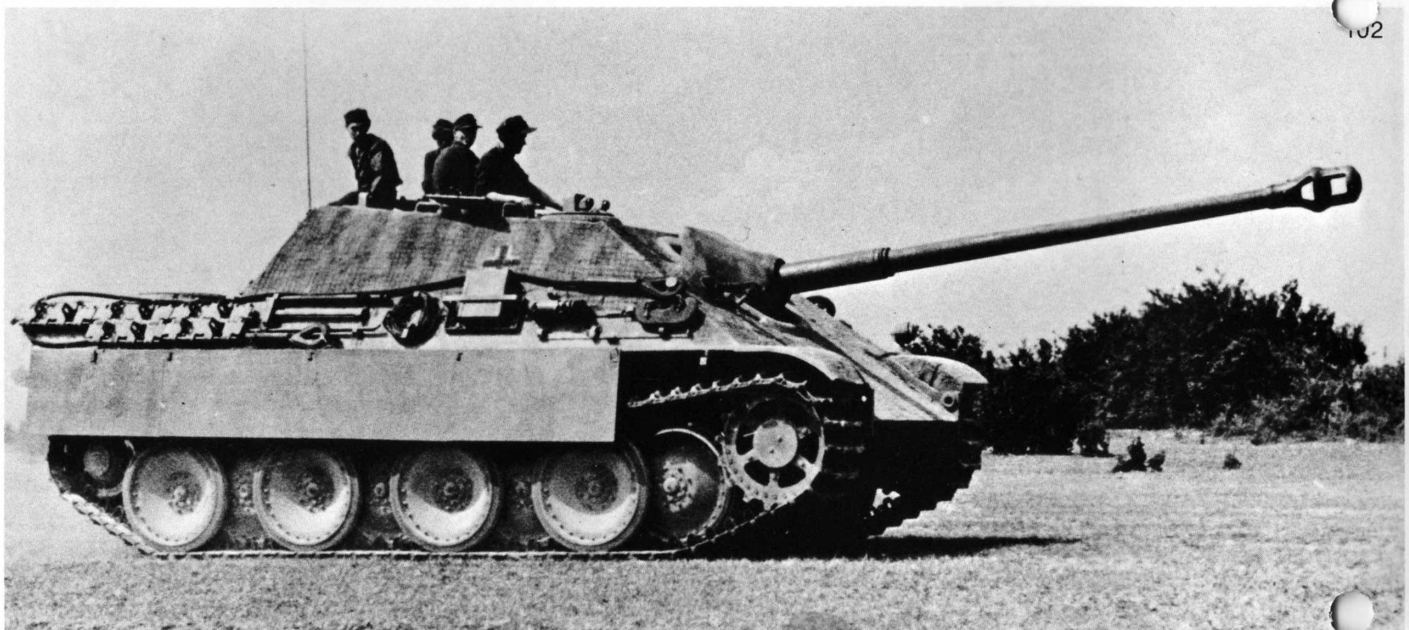
97

98

99

100

101



102

103

104

105

106

107

108

109

110

111

113

112

23

116

117

118

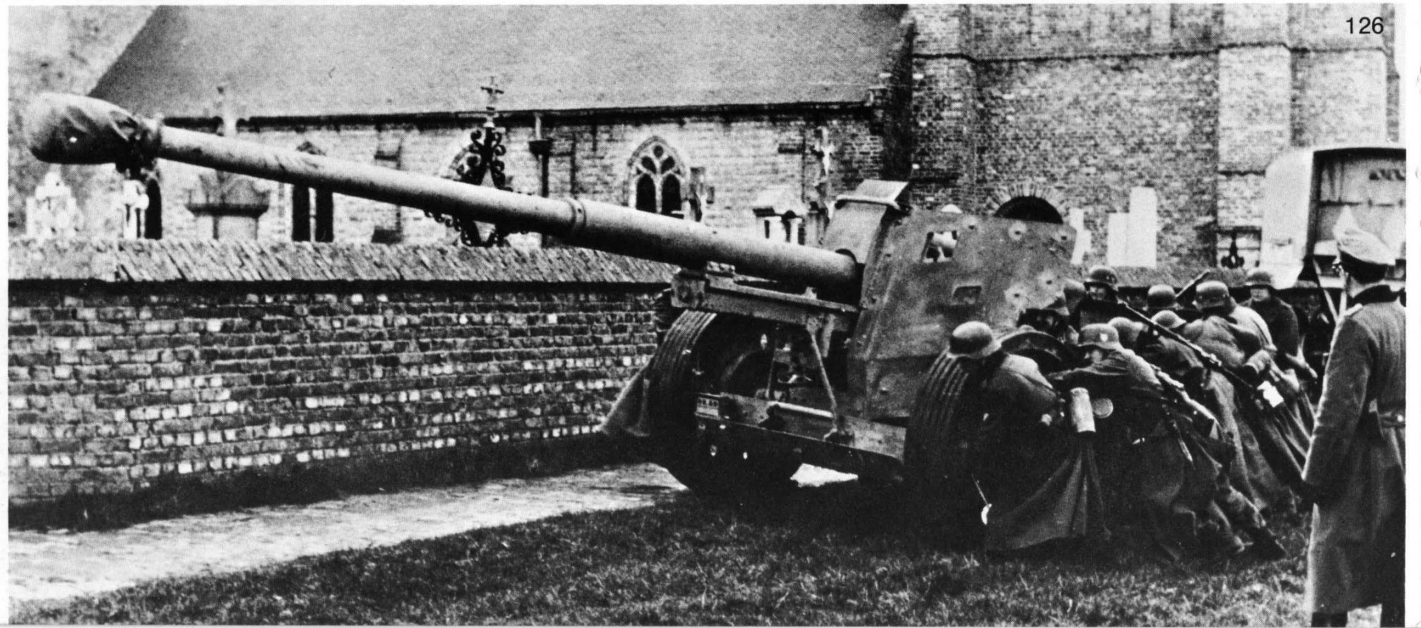
119

120

121

124

125



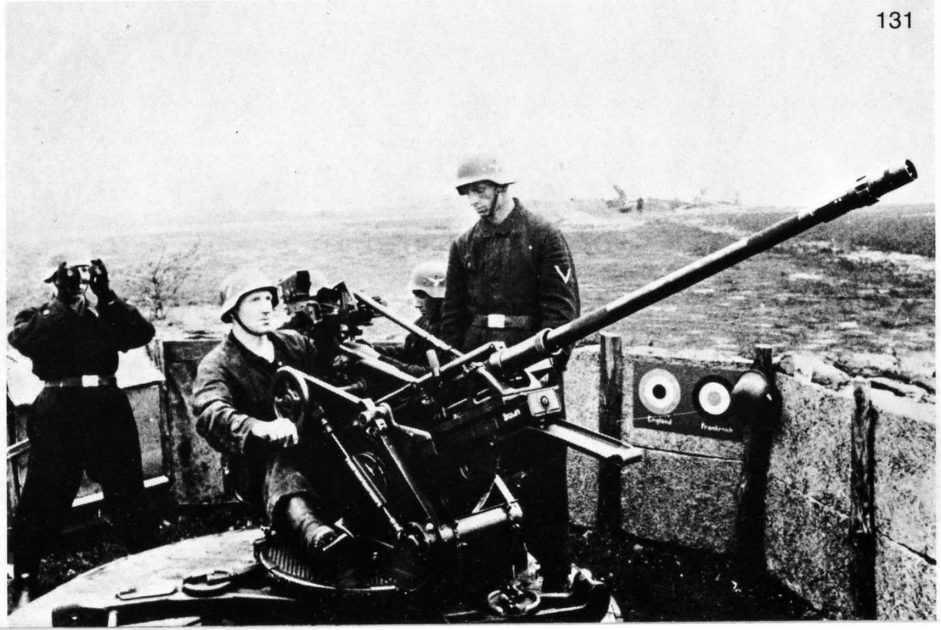
126

127

128

129

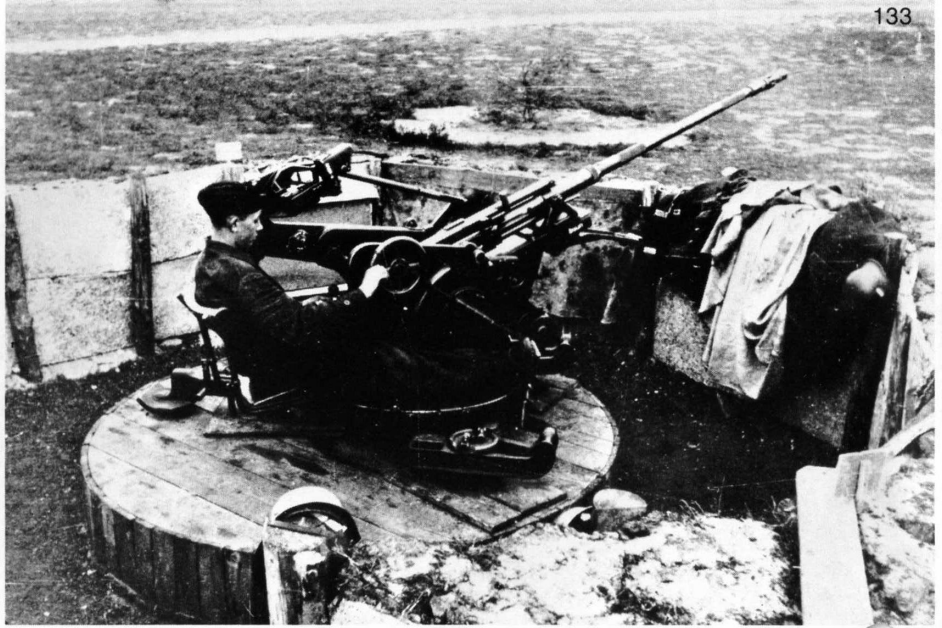
130



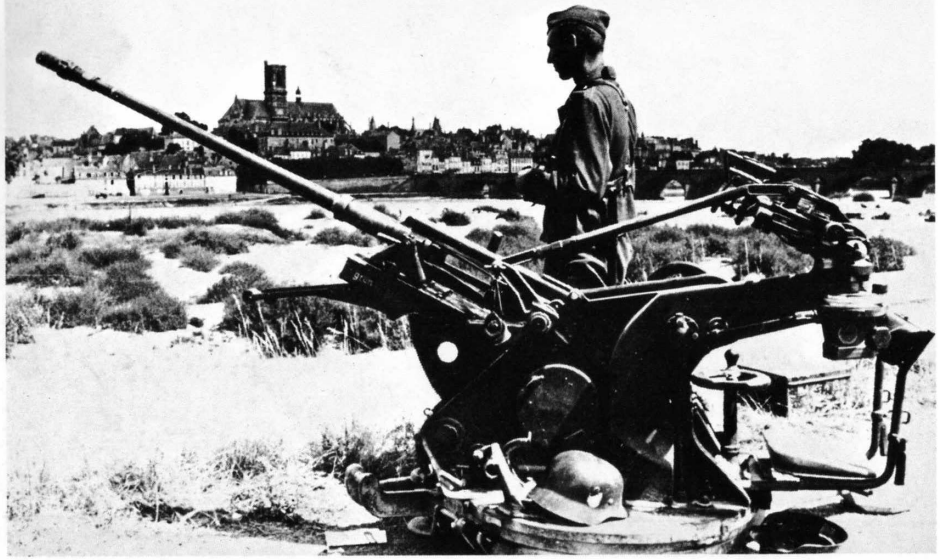
131

132

133



134



137

136

138

139

140

141

143

144

146

145

147

148

149

150

152

154

155

156

157

158

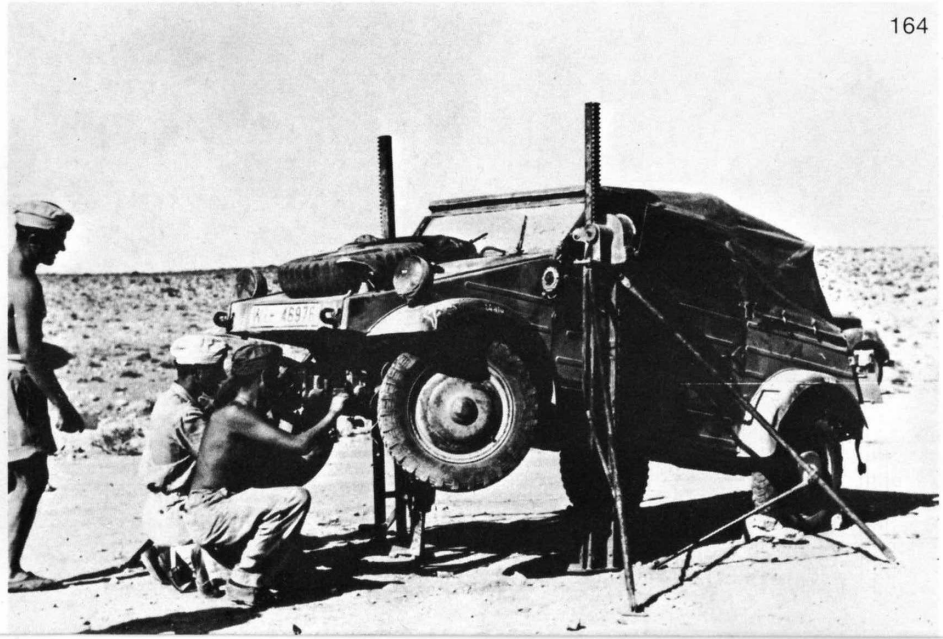
159

160

161

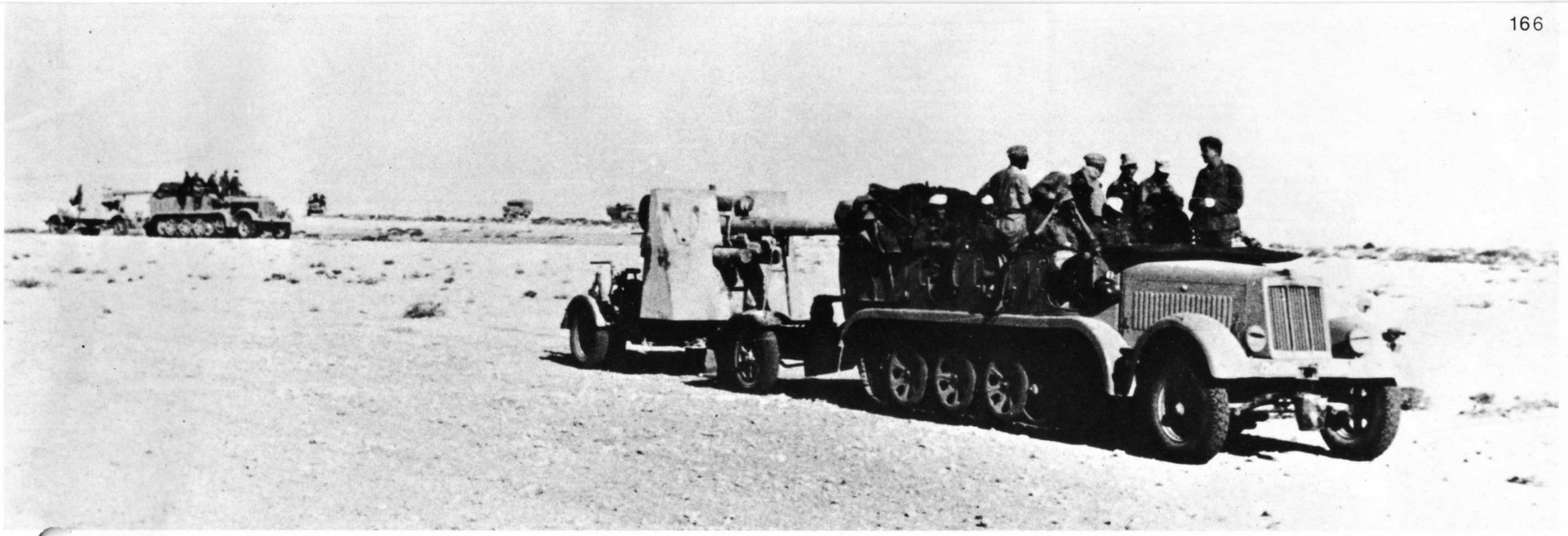
162

164



165

166



168

167

169

170

171

172

173

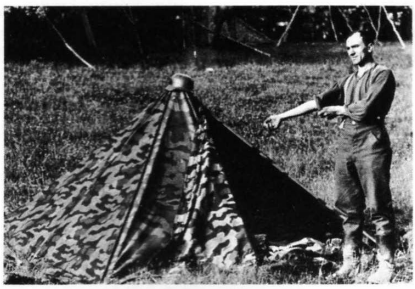
174

175

176

177

178



❶ 野営の朝。兵士が携帯しているポンチョは4枚合わせると野営用のテントになる。頂上部にはヘルメットが置かれて雨水を防いでいる。

❷ 野営の朝、食事を取りに集った兵士達。手にはハンゴウを下げている。

❸ 野戦用キッチン。戦地でも比較的落ちついた地区ではキッチン車が兵士達に温い食事を作った。

❹ 酷寒の東部戦線で暖をとる兵士達。

❺ MG－34を側に置いて食事をする兵士達。よごれた顔、そして雑になった軍靴はロシアに深入りしすぎたためだろうか？

❻ Ⅲ号突撃砲A型もしくはB型の側を進むドイツ歩兵部隊、1941年ロシア侵攻直後の風景である。

❼ フランスの田舎町を進むドイツ軍、フランス軍はダンケルクへと追い込まれつつあった。1940年。

❽ フランスを進撃するドイツ騎兵隊。ドイツ軍は軍馬を数多く終戦まで使用し、機動部隊の裏には息をするエンジンとして活用された。

❾ 朝モヤの中を前進するドイツの軍用馬車。

❿ 戦闘によって破壊された道路を再開するのは工兵隊の重要な任務である。

⓫ 対フランス戦で前進するドイツ軍。ドイツ軍も全べて車輌が割あてられたのではなく中には自分達で車を押して歩かなければならない不運な兵士もいた。

⓬ 降伏するソビエト軍の将校と兵士達、1941年、独ソ戦開始当初のドイツ軍は常勝でそのままモスクワ、レニングラード、スターリングラードを陥すかに思えたが……。

⓭ ウクライナの麦畑で負傷した兵士を見る衛生兵、彼らは通常の軍装であったが、腕に白地に赤十字の腕章を巻き、兵科色はムラサキであった。

⓮ 負傷兵の軽いものは現地で救急手当を受けたが重傷者は後方に送られた。

⓯ 戦地で死んだ兵士達はその土地に埋められた。日本の様に遺骨として後送されることはなく、そのまま異国の土となった兵士がほとんどであった。

⓰ 出会い頭に撃破されたソビエトのT－34／76F型。

⓱ ウクライナの草原で燃え続けるT－34／76。T－34／76は良く出来た戦車であった。しかし生産が軌道に乗るまでは数多いドイツ軍戦車を相手に苦戦せざるを得なかった。

⓲ 撃破されたルノー戦車。フランスはドイツと異り戦車を歩兵の援護兵器と考えていた。それが西部戦線でドイツ機甲師団に圧勝される原因を作った。

⓳ 敵砲弾の直撃を受けたSd Kfz 222。スカウトカーとして機甲師団の最先端を進撃するSd Kfz 222はそのロスも大きかった。

⓴ シリアで原住民から情報を集めるスカウト部隊。車輌はSd Kfz 231、8輪装甲車である。

㉑ 前線の観測所。包帯と木の枝でカモフラージュされた砲隊鏡、電話しているのは山岳師団小尉である。恐らくノールウェーに進出した部隊であろう。

㉒ 本部付きの通信車には各観測所、スカウトカーから情報が集まって来る。

㉓ 部隊から遠く離れた拠点からも情報が打電される。腕に付いた矢印は通信兵の特技章である。1944年頃である。

㉔ 野戦司令部で作戦を打合せるマントイフェル将軍。三角旗は師団師令部を示す。

25

㉕ 第25軍団の作戦指揮所の将校達。作戦地図を前に作戦を検討する。

㉖ 作戦は直ちに部隊に伝えられ、突撃戦車が出撃する。作戦図を広げる将校団の前を通過するⅢ号突撃砲Sd Kfz 142A型。

㉗ 無線器に向う対戦車部隊所属の通信兵。肩章に対戦車砲“PAK”を示す“P”の文字が見える。

㉘ 野戦電話器（有線）も拠点間連絡には広く使われた。

㉙ 野戦司令電話器で前線に連絡をとる通信兵。モミアゲを短くかり込んだドイツ軍特有の散髪がよく解る。

㉚ 重要な作戦図はオートバイ兵によって前線に運ばれる。オートバイはBMW。

㉛ 前線に向けてひた走るオートバイ兵。腰には図のう。オートバイ後部にも大型の図面カバンが取り付けられている。

㉜ フランスに進出した戦車師団のスカウトカー乗員と打ち合わせるオートバイ兵（中央）。オートバイコートはよごれ、いかにも進撃の素速さがうかがえる。

㉝ オートバイ兵に指示を与える4号D型車長。1940年、ノルウェーに進出した部隊のスナップである。

㉞ ウクライナに進出したドイツ軍軍警。立て札には“パルチザンの危険あり。単独車輌は要注意”とある。ナンバープレートは“POL”制服にはゴーゲット（胸章）及びそで章が付いている。

㉟ 燃える農家の横を過ぎるドイツ軍オートバイ部隊。1941年ソビエト進攻の直後である。

㊱ オートバイ部隊を従えてロシアの農村を通過する戦車師団所属のキューベルワーゲン。

㊲ エーゲ海に面したギリシャ遺跡前に駐車するキューベルワーゲン。夏用防暑服、白地の将校帽が面白い。

㊳ 渡河走行中のシュビムワーゲン。スクリューを下ろす為の長いパイプがめずらしい。冬に近い1943年東部戦線である。

㊴ 1944年フランスに進出した戦闘親衛隊のシュビムワーゲン。向うには撃破されたイギリス軍戦車と4号H型が見える。

40

40 シュビムワーゲンは水陸両用とはいえ水辺の泥地には苦労する。第一歩兵師団“グロス・ドイッチェランド”所属のシュビムワーゲン。

41 サイドカー付きのBMWと行き交う空軍のKfz 21・重車輌。フランス進攻作戦初期のスナップである。

42 ロシアの冬は車輌にとって敵よりも先ず雪と水との闘いであった。溝に落ち込んだKfz69を引き上げるステァーのRSO牽引車。

43 ロシアの平原には至るところ湿原があり大小の河川が流れていた。ゴムボートを利用したイカダが最も簡単な渡河法であったが、夏だけしか利用できない欠点があった。

44 交通の要所には工兵隊によって架橋が行なわれた。写真は渡河するSd Kfz 8、12トンハーフトラックで21cm野戦重砲の台車をけん引している。

45 砲兵隊を満載して前進するSd Kfz 8、12トンハーフトラック。メルセデスベンツ製である。

46 木の枝でカモフラージュしてバルカンを行くSd Kfz 10ハーフトラック。後部には弾薬車をけん引している。

47 37mm FLAK 36高射機関砲を搭載したSd Kfz 7/2。後方には車輌部隊が見え、FLAK36はカバーがかかっているが応戦できるよう射手が着座している。

48 チュニジアに陸上げされるケッテンクラート。空軍所属であるが、丸に矢印のマークはどの落下傘部隊のマークか不明である。

49 1944年冬、東部戦線で活躍するNSUケッテンクラート、地表が氷結する時期にはオートバイに替って通信任務に活用された。

50 1944年秋。ロシアの冬に先立つ雨期がやって来ると、RSO牽引車とケッテンクラートの活躍する時期になる。

51 フランス進攻作戦中のSd Kfz 223、(手前)とSd Kfz 231、共にグーデリアン麾下の識別記号“G”が白くプリントされている。

52 ロシア戦初頭1941年のSd Kfz 250/1(手前)と250/4指揮車である。共に第一歩兵師団、後に“パンツァーグレネーディア師団”となった“グロス・ドイチェラント”所属である。

53 オペル製Sd Kfz 4/1を改造して製作された15cmパンツァーベルファー。15cmのネーベルベルファーロケット弾を10発発射できた。

54 パンツァーベルファー(オペル製)砲塔部及び射手。発射の際には射手は車内に入り発射ガスを防ぐ。

55 1940年、西部戦線に進出したドイツ戦車部隊員。黒ベレーと略帽が混用されていたことが解る。ベレーは後に中止された。

56 Sd Kfz 250/3通信車。将校が同乗しているところから、戦車師団の司令部付きの通信車であろう。

57 バルカンに進出した3号戦車J型。第24戦車師団所属の部隊である。

58 ロシアの村を通過する3号戦車J型。

59 ロシア・ウクライナの平原に展開するドイツ機甲部隊。手前はSd Kfz 250装甲車。前方に見えるのは3号戦車の指揮車であり、アンテナが2本見える。

60 ロシアの平原を砂煙を立てて突進する3号戦車。

61 砂煙を立てて進撃するII号戦車L型(Sd Kfz 123)ルックスのめずらしいショット。ルックスは重装甲の戦車部隊用偵察戦車として造られた高速性能の良い車輌であった。

62 前進する4号F1型戦車。乗員の内3人までが車外に出ているのは味方の制圧圏内であろう。車体の後端に荷台が取り付けられているのが面白い。

63 工兵隊の側を前進する4号戦車。

64 ノルウェーに出撃した4号F1型。4号F型は、後輪がパイプの溶接加工で作られているので容易に判別できる。

65 ロシア戦線に配備になった4号J型。後輪がリブの付いた鋳物製となった点が特色であり、写真は戦闘に参加する以前に撮影されたものであろう、大変きれいな無キズのシールドが付いている。

66

66 制空権を失った戦車は裸同然であり昼間は行動の自由を失う。1944年フランスに進出した4号戦車と車輌部隊。

67 3号突撃砲A型。ロシア進攻開始直後の風景である。戦車と乗員が一緒に水浴びをしている。ドイツ軍車輌を示す十字の白線が細い点に注意。

68 パンツァーグレネーディア師団“グロス・ドイッチェラント”所属の3号突撃砲G型。側面シールドは取り付け金具だけでシールド自体は取り付けてない。

69 ロシア戦線に於ける3号突撃砲G型。F型に比べ戦闘室の横巾が広げられた。

70 砂煙をあげて突進する3号突撃砲F型。戦闘室前部側面に防弾を兼ねて車輪が取り付けられ、前面下部、及び左側には予備キャタピラーが防弾板として利用されている。

71 半分破壊された農家にひそむ3号突撃砲車G型後期型。鋳造の砲基部がブタの鼻に似ているところから“ザウコップブレンド”と呼ばれた。

72 4号戦車の車台を利用して造られたパンツァーハウビッツ18(M)フンメル。18cm榴弾砲を載せ、自走砲として生産されたフンメルは1942年から主として東部戦線に支給された。

73 ロシアの風車を背景に砲列をしくフンメル。

74 フンメルは単に4号F型車台上に榴弾砲を載せただけであり兵員は吹きさらされている。その為兵士はキルテングの野戦服が支給されていた。

75 パンツァーヤーゲルPAK43/1L/71

ナスホーン。フンメルと同じく4号の車台を利用し、その台上に8.8㎝高射砲を改良した対戦車砲(PAK43／1)を載せた対戦車自走砲である。

㊻ フランスに進出したタイガー戦車。初期の明るい色に塗装されている。

㊼ ロシアの平原を進むタイガー。

㊽ ウクライナの草原で小休止するタイガー戦車。

㊾ 弾薬の補充の合い間に食事をとるタイガーの乗員達。砲弾は2発づつ木製の箱に納っているが、戦車内には箱から出して格納する。

㊿ タイガー戦車への弾薬補充。弾薬箱は開けられて弾薬のみが車内に搬入される。砲の先端、制退器には木の枝がカモフラージュの為に差し込んである。

81

81 タイガー戦車のエンジン交換。タイガーに限らずドイツの戦車はエンジン部がブロックとして取り外せた。エンジン室を開く為には砲塔を90度回転させて横位置にする必要があった。

82 タイガー戦車と4連装FLAK38を載せたハーフトラック。タイガーは敵の戦車に対しては威力を示したが、空からの攻撃には弱い。そこで制空権を失ってからは対空部隊との協同作戦が必要条件となった。

83 ノルマンディーに上陸した連合軍を迎え撃つため進出したパンサー戦車。開いた後部ハッチ、車体後面に取り付けられたウィンチ、へこんだバケツ等が興味深い。

84 ロシアの村落へ進出するパンサー。白く塗られたカモフラージュもはげ落ちて戦闘の激しさを伝えている。戦車はA型又はD型であろう。

85 道路拠点を守備するMG－42重機関銃の側を通過するパンサー戦車。ホローチャージロケット弾よけのスカートが興味深い。

86 ロシアの森林にかくれるパンサー戦車。制空権を失ってからドイツの機甲師団の行動は困難の度を加えた。戦車に対しては強力なパンサーも木かげに巧みにカモフラージュされて駐車せざるを得なかった。

87 朝モヤをついて出撃するパンサー戦車とパンツァーグレネーディア。パンサーの後部には予備のガソリンがドラムカンに納められて積まれている。

88 敵戦車の出現を待つパンサー戦車。空からの攻撃をそらす目的も兼ねて木の枝で巧みにカモフラージュされている。それでも敵機の飛来は気になるらしく観測手の目は自然に空に向う。ノルマンディー後のフランス戦線である。

89 パリ凱旋門を通過しノルマンディーに向うパンサー戦車。

90 シュビムワーゲンと並ぶパンサーA型。騎士勲章を付けた将校が車長であり車体番号が“0”であるところから指揮車であろう。

90

91 パンサー戦車の側を行くパンツァーグレネーディア。

92 ヒットラーが期待した“ケーニッヒティーゲル”(キングタイガー)。当時最強の戦車として1944年5月初めて東部戦線に出現した。写真のモデルはヘンシェル型の砲塔を備なえている。

93 ポルシェ型砲塔を備なえた“キングタイガー”8.8㎝KWK43L／71砲の発射。8.8㎝KWK・L／71は、有名な88FLAK－36高射砲を改良して対戦車砲としたものであ威力は当時のソビエトの全べての戦車を破できた。

94 砂煙をあげて突撃するキングタイガー。

95 フランスに上陸した連合国軍を喰い止めるため進出したキングタイガー。側をドイツ兵に監視された英軍捕虜が手押し車で食料を運んで行く。

96 ポルシェ型砲塔を備なえたキングタイガー。非常に長いKWK43L／71は高い初速を得ることができ、80発の砲弾を収納できた。

97 森林の集合地点から出撃して行くキングタイガー。

98 カモフラージュ塗装を行なうキングタイガー。砲塔はヘンシェル型である。この写真から見ると、シャベル、ロープ、クランク等は装着したままカモフラージュ塗装が行なわれた事が解る。

99 パンサーを改造して造られたヤークトパンサー。パンサーの砲塔の替りに固定式の大型戦闘室を備え、8.8㎝ KWK43を装着した対戦車用の駆逐戦車である。

100

100 前面を木の枝でカモフラージュして林から突撃するヤークトパンサー。

101 走行試験を行なうヤークトパンサー。避弾傾斜の前面装甲板とシンプルな外観はドイツ駆逐戦車中最高のデザインである。

102 側面から見たヤークトパンサー。

103 大戦初頭ドイツ軍の主要MGであったMG－34。3人グループで、指揮下士官(左)、射手、弾薬手の位置が解る、写真では3脚架に載せて重機として利用している。

104 8.8㎝M54バズーカ。ドイツ軍は東部戦線で捕獲した米軍のバズーカをコピーしてM43バズーカを完成した。M54はそれに発射ガス除けのシールドを取り付けたもの。ドイツ軍

内では“パンツァーシュレッケ”と呼ばれていた。

105 有名なドイツの対戦車ロケット弾“パンツァーファウスト“の正規な射撃姿勢。このロケット弾の欠点は弾道が不安定で、しかも射程が短いことであった。しかし軽便なところから戦争後半多用された。

106 10.5cmL.G.40無反動砲。L.G.40は後方にガス圧を逃して反動を減少させる無反動砲であり、10.5cmという大口径は歩兵用火砲として大きな威力を示した。

107 8cmG.R.W.34迫撃砲。8cmG.R.W.34はドイツ軍で最も多用された迫撃砲であり、3人で1グループとなって射撃を行なった。

108 8cm G.R.W.34迫撃砲の野戦射座。迫撃砲は射程が短い為に敵に近ずく必要があり、自身を守る為に穴を掘ったり、砲弾穴を射座として利用した。

109

109 G.R.W.34発射の瞬間。兵士達は発射ガスから身を守る為に伏せている。

110 7.5cmL.I.G.18軽歩兵砲。7.5cmL.I.G.18は歩兵用の軽量火砲として多用され、リフト型のブリーチ部に特色があった。

111 ノールウェーを進む3.7cmPAK。けん引しているのはKfz11中型車である。エーデルワイスの第6山岳兵師団マークが興味深い。

112 撃破された敵戦車の側で小休止する3.7cmPAK。砲のシールドには予備弾薬箱を積む為の金具が見える。

113 射撃配置に付いた3.7cmPAKの射手達。体を低くして射手、観測手、弾薬手の全員がシールドの後にかくれる様にしている。

114 スポーク付き車輪を持つ3.7cmPAK。ソビエトの3.7cmPAKはドイツ製と大変良く似ており、捕獲された砲はそのままドイツ軍によって使用された。

115 フランスに進出したPAK 3.7cm対戦車砲。兵士がルガーP.-08で武装し、銃剣も吊っている点が面白い。ヘルメットの前面も火砲前面と同じくカモフラージュ用の木の枝が差されている。

116 敵戦車の出現を待ち受ける3.7cmPAK。砲の後方にはケースに収められた弾薬が見える。

117 3.7cmに取り付けられた対戦車ロケット榴弾M41。対戦車ロケット榴弾は砲口から差し込んで装着した。

118 対戦車ロケット榴弾M41。戦車が強化された東部戦線では3.7cmPAKの威力は期待できなかった。そこでホローチャージのロケット弾M41が発明されて利用された。

119 1トンハーフトラック（HK 300シリーズ）にけん引される5cmPAK38。工兵隊によって造られた架橋を過ぎてゆくPAK38である。恐らく戦車師団所属の対戦車砲部隊であろう。

120 馬に引かれてロシアの農村を通過する5cmPAK38。ドイツ軍はロシア軍と並び軍馬を多用したが、PAKを馬に引かせるというのはめずらしい。兵士が座っているのは弾薬車である。

121 本格的な砲列を敷いたPAK38。浅く穴を掘り、シールドの上半分を残して地中に入れた射座は教科書通りの防禦陣である。

122 防禦射座で砲弾を装填する5cmPAK38。前面を木の枝でカモフラージュし敵戦車の出現に備なえるPAK－38である。兵員の自衛兵器としてP－38拳銃が腰に見える。

123

123 草とネットによってカモフラージュされた7.5cmPAK－40。ネットは空からの偵察に影が出来ない様に全体を被うものである。守備している兵士達はワッフェンSSの兵士で特長あるカモフラージュ衣を着用している。

124 道路を見下ろす絶好の位置に射座を設けたPAK－40 7.5cm対戦車砲。

125 8.8cmPAK43/41と3.7cmPAK35/36。大戦中ドイツが最も利用した3.7cmと実用化された内では最大の8.8cm対戦車砲を比較するには絶好のめずらしい写真である。

126 ノルマンディ後のフランスに進出したPAK43／41。全高の低い事が条件の対戦車砲も8.8cm級になると非常に大きくなる。人物と比較すると面白い。

127 試作型の8.8cmPAK－43。PAK43／41が大変大型であったものを改良し、全高を低くした製品であるが、支給された製品は分離式の車輪を付属していた。

128 配置に付いたPAK－43/41、8.8cm対戦車砲。PAK43／41はFLAK－41万能高射砲を改良して対戦車専用火砲としたものである。

129 道路側で車輪を付けたまま警戒体制をとる2cm高射機関砲FLAK－30。FLAK－30は通常2輪でけん引される軽便高射機関砲で戦争中に広く利用され、特に車輌部隊の自衛用としては欠かせなかった。

130 戦闘中のFLAK－30、2cm高射機関砲。FLAK－30には自衛用のシールドを取り付けたモデルがあり、特に地上戦闘の時には有効であった。煙を吹きながら空薬莢が銃の右側に飛び出している。

131 防衛陣地に置かれた2cmFLAK－30。半地下式の防衛陣は本格的な工築で恐らく重要拠点周辺であろう。後方にイギリスとフランスの飛行機識別色が示されている。

132 飛行場に設置されたFLAK－30。後方にはJu88爆撃機が見える。FLAK銃座の手前にはヘルメット収納箱が見え、床はすべらない様に板が敷きつめてある。

133 2cmFLAK－30と着座した射手の姿勢を示す。銃座は典型的な防御陣地の構造で雨水の浸入を防ぐために中央に一段高い砲固定座が造られている。

134 側面から見た2cmFLAK－30。風景から見ると大西洋に向うフランス北部であろう。

⑬⑤ 車載2㎝ＦＬＡＫ4連装38。4連ＦＬＡＫ－38は単装のＦＬＡＫ－38を4機合わせて発射速度及び集弾性能を向上させたものである。車載の他52型トレーラーに載せてけん引することもできた。

⑬⑥ 8.8㎝ＦＬＡＫ－18。8.8㎝ＦＬＡＫは高射砲としてよりむしろその高初速を利用した対戦車砲として恐れられた。後には更に対戦車砲として利用し易くシールドも取り付けらた。

⑬⑦ 8トンハーフトラックにけん引され雪中を目的地に向う8.8㎝ＦＬＡＫ－18。改良型で防弾シールドが付いている。

⑬⑧ ドイツ砲兵の最も多用した標準砲ＩＧ－18、10.5㎝榴弾砲。

⑬⑨ 目的地に到着した15㎝ネーベルベルファーロケット砲。直ちに兵員車、弾薬車を兼ねた3トンSd Kfz 11ハーフトラックからベルファーは外され車輌はカモフラージュされる。

⑭⓪ ロケット弾を装塡中のネーベルベルファー。このロケット砲の形式は6連装で15㎝ネーベルベルファー41と呼ばれた。

⑭① 弾薬の装塡が終り射手は発射器を持ってケーブルを引いて後退する。発射ガスをさけるためである。

⑭② ネーベルベルファー発射の瞬間。弾は白煙と黒煙を引きつつ敵地に飛行する。射程は短く、命中精度は余り良くないが、一時に多数弾を発射すると多大の威力があった。

⑭③ 28㎝ロケット弾。スターリングラード攻撃中のスナップである。28㎝ロケットはネーベルベルファーより更に単純な発射器（運搬ケースを兼用している。）から発射できた。

⑭④ 黒煙を残して敵拠点に飛行する28㎝ロケット弾。下方には使用済みの発射ケースが山になっている。

⑭⑤ ロシアで利用されたプロペラスライダー。地表が完全に凍結するロシアではスライダーが役に立つ移動手段であった。

⑭⑥ ロシアの湖を行くドイツのスツュルムボート（突撃ボート）。スツュルムボートは英国進攻作戦（ゼーロー ベ）用に造られたが、対ソビエト開戦後湖の多いロシアで役に立った。

147

⑭⑦ アフリカ戦線の2号戦車とSd Kfz223無線車。

⑭⑧ 展開するSd Kfz222。後方にSd Kfz232（Ｆｕ）無線車が見える。

⑭⑨ イタリア軍将校と打ち合わせるロンメル将軍。彼の車輌エンジン部にはドイツのカギ十字の旗が空からの識別用に取り付けられている。

⑮⓪ 砂漠戦では特に大切な水を井戸からくみ上げる兵士。

⑮① 3トンハーフトラックSd Kfz 11にけん引されて行く歩兵砲ＩＧ－18、10.5㎝砲。

⑮② Sd Kfz11から外されて発射準備をされるＩＧ－18歩兵砲。

⑮③ ＩＧ－18歩兵砲の発射。

⑮④ 北アフリカ戦でドイツ軍主力対戦車砲となったＰＡＫ－38。口径5㎝で当時の英軍戦車には充分な威力があった。

⑮⑤ 空軍地上部隊のＭＧ－15。ＭＧ－15は本来航空機用であったが、地上用としても改造型が主に空軍地上部隊によって使用された。

⑮⑥ 防衛陣に置かれたＦＬＡＫ－30、2㎝高射機関砲。地上戦用のシールドが付属しており、9本のキルマークが銃身に書かれている。

⑮⑦ 北アフリカの飛行場に急造されたＦＬＡＫ－30射座。付近の石を積み上部だけに土のうを置いた簡単なものである。

⑮⑧ オペルブリッツ・トラックの荷台を取り外して急造した車載ＦＬＡＫ－38。

⑮⑨ Kfz70（ホルヒ40）を利用改造した車載ＦＬＡＫ－38。

160

⑯⓪ 同上

⑯① ⑯② 同上

⑯③ 古いアラブの城を利用した軍拠点から出動するキューベルワーゲン。

⑯④ 巻き上げ式のジャッキを利用したキューベルワーゲンの応急修理スナップ。

⑯⑤ 砂漠に造られた軍用車輌修理工場。折りたたみ式のクレ ーンが面白い。

⑯⑥ 前進するドイツ88㎜ＦＬＡＫ部隊。

⑯⑦ オートバイ兵から指令が届き射撃準備にかかる。

⑯⑧ 8トンSd Kfz 7ハーフトラックから外された88ＦＬＡＫはトレーラーを切り離して着地される。

⑯⑨ 飛来する敵機に向けて発射される8.8㎝砲弾は周囲の砂を巻き上げる。砲の周囲には急ぎ土のうが並べられる。

⑰⓪～⑰⑤ドイツ北アフリカ軍団の2㎝4連対空砲ＦＬＡＫ38の射撃訓練の風景である。

⑰⓪ 一軸式特殊被牽引車52型と呼ばれる台車にのせられたＦＬＡＫ38が、オペル・ブリッツ3トントラックにひかれて到着する。

⑰① トラックから切りはなされたＦＬＡＫ38は直ちに砲の台座の左右および後方にとりつけられているジャッキによって地上に固定され…

⑰② 砲の台座が完全に着くと台車は自然にはずれ、後方にひき出すことが出来る。

⑰③～⑰⑤台車を砲座からはなれたところにひき出すと、たたまれていたシールドをひろげてセットし、射撃にかかる。

⑰⑥～⑰⑧同じくＦＬＡＫ38の砲座構築の模様、こちらは西部戦線であろう。石ころの多い畑地のはずれに強引にひきずりこんで、台車をはずして砲座から離している。略帽の観測手の測距儀支持用具に注意。

TAMIYA

タミヤニュース資料写真集－2
ドイツ戦場写真集
編集解説　兵器研究家　床井雅美

TAMIYA PLASTIC MODEL CO.
3-7 ONDAWARA, SHIZUOKA-CITY, JAPAN
TELEPHONE 054 286 5105

発行●株式会社田宮模型
静岡市恩田原3-7　〒422
定価●400円